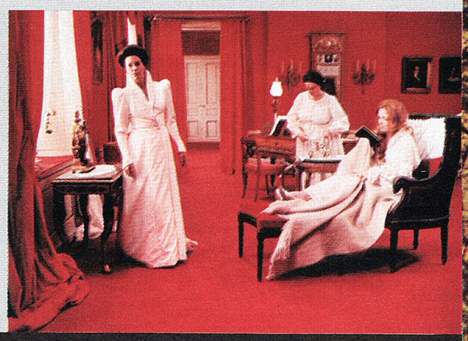
世界映画の名匠ベルイマンが
名作「沈黙」から10年
華麗な色彩で描破する
'73年度最高の芸術大作！

叫びとささやき

イングマール・ベルイマン監督作品

En film av INGMAR BERGMAN
VISKNINGAR OCH ROP
Med
INGRID THURIN
HARRIET ANDERSSON
LIV ULLMAN
KARI SYLWAN
Fotograf SVEN NYKVIST



1972年度ニューヨーク映画批評家賞
作品賞
監督賞（I・ベルイマン）
脚本賞（I・ベルイマン）
主演女優賞（L・ウルマン）
1972年度全米映画批評家協会賞
脚本賞（I・ベルイマン）
撮影賞（S・ニークビスト）

人間の、女の、心の底にうごめく
たえざる性と死へのおののき
とぎすまされた名匠の感性が
現代の孤独をあばく衝撃問題作！

監督・脚本 イングマール・ベルイマン
撮影 スベン・ニークビスト
美術 マリク・ボス
音楽「マズルカ・イ短調・作品17-4」
（ショパン／演奏 シャーリ・ラレテイ）
「組曲第5番・ハ短調」より「サラバンド」
（バッハ／演奏 ピエール・フルニエ）
出演者
イングリッド・チューリン
ハリエット・アンデルソン
リブ・ウルマン
カリ・シルバン
カラー作品

TOWA
東和《創立45周年記念》作品
東和提供・スウェーデン映画

近日ロードショー ★ 日比谷 みゆき座 (571) 5357

■「沈黙」から10年 ― 待望のベルイマン作品が公開される！

スウェーデンが世界に誇るイングマール・ベルイマンは、芸術性の極致を追求し続ける数少ない作家として、世界映画史上に不動の位置を占めている。だが、近年わが国では、興行的な見地から、彼の作品は陽の目を見ることがほとんど不可能であった。事実、この作品は、「沈黙」以来10年、「ペルソナ」以来7年と、ファンならずとも待望のベルイマン作品となった。しかし最近の製作活動は活発そのものである。『狼の時間』(67)、『恥』(68)、『パッション』(69)、『ザ・タッチ』(71)と、いずれも彼の本領が十二分に発揮された作品として、海外ではベルイマンの最高に円熟しきった黄金時代の到来を告げている。

■早くも本年度ベスト・ワンの呼び声高い最高傑作！

そんな中で発表されたこの「叫びとささやき」は、過去のベルイマンのすべてをのりこえた傑作として、今や世界に一大センセーションをまきおこしている。72年度ニューヨーク映画批評家賞の作品・監督・脚本・女優〈リブ・ウルマン〉賞を独占したのをかわきりに、同年全米映画批評家賞で脚本・撮影賞を、さらに72年カンヌ映画祭でも、フランス映画技術委員会賞に輝やいている。わが国でも昭和48年度芸術祭の本命として早くも本年度のベスト・ワンは確実と、日増しに異常な反響を呼びおこしている。

■「叫びとささやき」はどんな映画か！

《この映画を私の愛する母に捧げる。そしてあなたのために作った映画なのです。》

この様にベルイマンは語っているが、ストーリーは前世紀の末の頃、スウェーデンの豪華な大邸宅が舞台となっている。そこに住み、子宮癌に冒され、刻々と死に近ずいている次女と、見舞にきた姉と妹。そして次女に仕える召使の4人の女性が、死んでゆく肉親に直面せざるをえないドラマチックな状況の中で、女性たちの心の奥底に潜む、愛・孤独・性・苦痛・恐怖といった内面の揺れ動きを、〝叫びとささやき〟としてとらえ、ひとつひとつの映像がきびしくえぐりだしてゆく。そこにはベルイマンの母に対するイメージが四人の女性に色濃く投影されている反面、観る者すべての心の深層が正確に、残酷なまでに描き出されてゆくのである。

観る者は、そんな人間の疎外とか断絶とかいう言葉を通りすごした孤独地獄とも呼ぶべき極限状態にひきずりこまれるが、ラストでは一転して、人生への感謝の念が力強く語られる。そこでこそ私たちは、無限の感動と違大な傑作に接することの出来た喜びを存分に味わうことができるのである。

■ベルイマンの愛した女性たちが揃って共演！

出演者たちはベルイマン作品でおなじみの顔がつらねている。長女カ〉ーリンには「沈黙」「戦争は終った」(仏)のイングリッド・チューリン、次女アグネスには「鏡の中にある如く」「愛する」のハリエット・アンデルソン、三女マリアには「ペルソナ」「夜の訪問者」(仏)など、最近めきめき売り出し、国際的に活躍しているリブ・ウルマンがあたっている。特にリブは、世界で最も美しい女優と呼ばれており、生れはなんと東京である。彼女とベルイマンの熱烈なロマンスはあまりにも有名である。また、チューリンとアンデルソンもかつてベルイマンと恋愛をくりひろげた仲であり、彼女たちと息のあった演出もうなずけるわけである。また召使アンナを演ずるカリ・シルバンは健康的で肉感的な容姿だがこの映画の重要な役柄は、新しいベルイマン組の貴重な新進スターとなった。

男優たちもみなベルイマン組だ。

■鮮烈なカラーは、本邦初公開！

ベルイマンはすでに四本のカラー作品を発表しているが、わが国ではこの映画が初めてのカラー作品である。その斬新なカラー処理は、部屋の中の床や壁を赤一色で統一し、場面のくぎりも、血を想わせる真紅の色を暗示的に使いわけている。

撮影はベルイマン作品にかかせない名手スベン・ニークビストがあたり、光の変化を自在に使いわけた微妙な色彩効果と、クロース・アップを多用して、その構図は一部のすきもない正確さで、息をのむほどの迫力をあげている。

■目をおおうショッキング・シーン！

長女カーリンを演ずるイングリッド・チューリンは、貞淑な妻を装いながらも高慢な性格と、どうしようもなく夫を軽蔑している愛のない生活にさいなまされる。彼女の幻想はこの映画の中でも一番ショッキングなシーンに自虐的な姿をさらけ出す。夫と心のかよわぬ夕食のひととき、ワイングラスをこわした彼女は、その破片をとっておき、ネグリジェに着かえてから、それを歓びのない自分の性器に突き刺す。そしてベッドに横たわって、血まみれになって夫を見すえる――「沈黙」の時でも孤独な長女に扮していた彼女だが、その自慰のシーンは、当時としては驚異的な描写だった。だが、この作品では、より深い苦脳を背おった女性像を再び演じ、その強烈なシーンはベルイマンでなくては描きえなかったであろう。

■この映画に寄せられた賞讃！

◎円熟したベルイマンの最高傑作。
タイム誌(米)

◎人間の孤独と生命の歓喜を二つとも見事に描いて、ベルイマンの作品の中でも傑作中の傑作だ。
ベッコシュールナーレン誌(スウェーデン)

◎「映画とは何か」を教えてくれる映画だ。
ニューヨーク・タイムズ紙(米)

◎いつまでも心に残る映画だ。それは、スクリーン上にあなた自身を見るからだ。
ニューヨーク・ポスト紙(米)

◎愛するゆえに、ベルイマンは女性を切る。そして人生の深淵を。
ニース・マタン紙(仏)

◎ラスト・シーンはあなたに生きることと、愛のすばらしさを教える。
エクスプレッセン紙(スウェーデン)